

カード目録排列上の試み

—漢字の特性を生かした排列を考える—

今 村 実 千 代

はじめに

図書館において目録は資料を検索する上で、不可欠なものであることはいうまでもない。利用者にとって目録による検索は面倒な時間のかかる作業である。従って、図書館側ではなんとか簡単に短時間で済むように、わかりやすい目録の作成と、その排列を考えなければならない。

排列に関しては、日本目録規則に6ページにわたり、その方法が記載されている。これは、「片かなで表記された標目の五十音順による」排列法で、大学図書館の多くが採用しているヘボン式ローマ字表記の排列に、そのまま適用することはできないし、さらに詳細な排列規則がなければ排列が曖昧になる。

中京大学図書館においては、『日本十進分類法新訂7版』のローマつづり表と、同、凡例2の表記法（いわゆるヘボン式ローマ字表記法）に基づいて標目をとっている。排列は、アルファベット順で、大枠では日本目録規則の排列法をローマ字に置換えて行っている。詳細排列規則は後に示すが、ここで問題にしているのは、規則に従って排列したものが、果たして利用者の側からは使いやすいかどうか、ということから、著者名の排列を対象として、同姓異字の取扱いから小見出し（山カードによるガイド）のつけかたまでを検討し、検索が比較的容易にでき、時間の短縮もできる方法を模索してみた。

トレーシングを五十音にすれば、ローマ字表記を読みとる困難さから解放

されるが、いずれにしても、普段漢字仮名交じり文に慣れている利用者には、目に飛び込んで来る感じはなく、不便なことは五十歩百歩である。日本式ローマ字は小学校で体系だてて習うが、ヘボン式ローマ字は中学で英語の時間にふれる程度で、特に拗音などの表現については、読むのも書くのも利用者は苦手のようだ。

大学図書館においてヘボン式ローマ字を採用ところが多いのは、所蔵資料に洋書、翻訳書が多いことなどの理由によるが、過去の蓄積を無視することはできないので、電算化などの機会に全蔵書目録に手を加える事でもなければ、変更することは不可能である。従って、現在の目録をいかに使い易くするかが、当面の問題であると思う。従って見出しカードにより漢字を生かした目録の排列を、片仮名やローマ字を組合わせてみたら、という発想からこの試案を考えてみた。

中京大学図書館のカード目録の排列について

目録カードの排列にあたっては、カードが出来上がってそれぞれのカードに仕分けた後、記述と標目指示（トレーシング）の該当個所に赤鉛筆でアンダーラインを引き、『日本目録規則新版、予備版』を基本としてローマ字のヘボン式に置き換え、アルファベット順に並べている。それより細かい排列については、次のような規則で排列を行っている。

- 1) 語順排列で姓と名を1単位とする。
 - 2) 同一排列順位の人名、団体名（全体を姓と扱う）について、人名、団体名が同一排列となるときは、人名、団体名の順による。
 - 3) 同一排列順位の姓については、使用されている文字の ①片かな ②ひらがな ③かなまじり ④漢字（字数の少ないものから多いものへ）のアルファベット順による。
- ※ 標目全体が同一になる時もこれによる。
- 4) 同名異人、同名異団体の場合 ①書名 ②出版者の順による。
 - 5) 著者における s（件名著者）は、その著者のうしろに排列しその中で、

①書名 ②出版者の順による。

6) 長音符号 (／) は排列上無視する。

7) 同一著者の場合は書名の順による。

8) 同一著者、同一書名の場合は出版者の順による。

9) 同一著者、同一書名、同一出版者の場合はその書名の順による。

10) 同一著作の場合は版次または出版年の順による。

11) 別法として、同一標目のなかは、出版年の古いものから新しいものへの順による。

12) 同一著作の開架図書、閉架図書の場合は、開架図書を先にする。開架図書と参考室の図書の場合は、参考室の図書を先にする。

上記の排列細則の問題点についてさらにほりさげると、

1) 同一姓で名の異なる場合は、カードの著者標目（著者、編者、訳者、校訂者）等標目に表れた著者はすべて排列するが『日本目録規則、新版予備版』によると「姓が同一排列順位となるときは名の順による。」とあり、

中京大学豊田図書館には約550の同一姓の読みがあった。今までは『日本目録規則』に基づいていたが、それを字画数排列に変えてみた。

※ 国立国会図書館典拠録は、ローマ字の訓令式により同一姓の読みが同じ時は、名の順によって載せてある。

〔例〕 ① Sima, Taizi 志間 泰治 ② Sima, Takasi 志摩 隆
 ③ Sima, Takesi 島 武 ④ Sima, Tameo 島 為男
 ⑤ Sima, Tamon 島 多聞 ⑥ Sima, Tamotu 島 保
 ⑦ Sima, Tarô 島 太郎 ⑧ Sima, Tatuo 志摩 達夫
 ⑨ Sima, Teruo しまてるお ⑩ Sima, Tosio 島 利雄
 ⑪ Sima, Tuyosi 島 与志 ⑫ Sima, Yasuhiko 島 泰彦
 ⑬ Sima, Yôko 志摩ようこ ⑭ Sima, Yonao 島 四男雄
 ⑮ Sima, Yônosuke 島 洋之助

※ 日本全国書誌（週刊版）索引をみると、姓が同一排列の時は名の五十音になっていて国立国会図書館典拠録はローマ字排列と五十音順排列が

違うだけであった。

- 〔例〕 ①安部 譲二 ②阿部 錠輔 ③阿部だいじ ④阿部 達夫
⑤安部ちとせ ⑥安部 智巳 ⑦阿部 登 ⑧阿部英太郎
⑨阿部 裕 ⑩阿部 牧郎 ⑪阿部三樹夫 ⑫安倍みちよ
⑬阿部 三夫 ⑭阿部 実 ⑮阿部ゆたか

※ 出版年鑑と電話番号帳をみると、五十音順排列で同音漢字は字数の少ないものから順に排列してあった。

〔例〕 出版年鑑

- ①安西 水丸 ②安西祐一郎 ③安齊 義雄 ④安細連太郎
⑤安津 素彦 ⑥安藤 昌益 ⑦安堂 信也 ⑧安藤 淳平
⑨安東 誠一 ⑩安東 聖空 ⑪安藤 隆夫 ⑫安東 次男
⑬安藤 貞一 ⑭安藤 俊子 ⑮安藤 紀之

電話番号帳

- ①安杖 正一 ②安土幸一郎 ③安積 浩樹 ④安東 種男
⑤安東 毅 ⑥安東 敏昭 ⑦安東 信隆 ⑧安東 秀樹
⑨安東 英雄 ⑩安東 広 ⑪安藤あさみ ⑫安藤 明
⑬安藤 明雄 ⑭安藤 明子 ⑮安藤 明敏

山カードにはアルファベット見出しだけでなく、画数排列することによって、漢字見出しを多用し、利用者がカードケースを開けたとき、目を引くようにしてみた。

トレーシングはローマ字のヘボン式であるため出版年鑑と電話帳の方式にならって排列すると次のようになる。

- 〔例〕 ① Abe, Isamu 安部 勇 ② Abe, Fujio 安部富士男
③ Abe, Akiko 阿部 明子 ④ Adachi, Tsunamitsu 安立 綱光
⑤ Adachi, Akio 安達 昭男 ⑥ Adachi, Akeo 足立 暁生
⑦ Adachi, Chikashi 足達 九

と最初の漢字の画数の少ないものから多いものへ排列し、漢字見出しを出してみた。上記を読みから配列すると

- ① Abe, Akiko 阿部 明子 ② Abe, Fujio 安部富士男
③ Abe, Isamu 安部 勇 ④ Adachi, Akeo 足立 暁生
⑤ Adachi, Akio 安達 昭男 ⑥ Adachi, Chikashi 足達 九
⑦ Adachi, Tsunamitsu 安立 綱光

となり、同じ漢字のがばらばらに排列されるので見出しは『Abe』とか『Adachi』とローマ字で付けるようになる。

2) 同姓異音の場合

日本人の読みは、本当にややこしく同じ字なのに読みが違うのが数多くある。

〔例〕 合田→ Gôda, Aida	東→ Azuma, Higashi
副島→ Fhkushima, Soejima	古谷→ Furuya, Furutani
上山→ Kamiyama, Ueyama	神野→ Jinno, Kôno
日下→ Hinoshita, Kusaka	

と数えあげればきりがなく、『をも見よ』参照による双方からの誘導をすると、カードの量は倍になる、姓名を正確に読む事は当然のことで、双方にカードを入れる方が望ましいが、無理に一本化して『を見よ』参照のみにする方法をとっている。しかし、その統一も確たる基準がない上、『を見よ』カードもすべて入っている訳ではないので、不完全な目録となっている。これは今後の検討課題である。

『を見よ』参照は著者に関してはよく知られている姓の方へ導いているが、(この場合「よく知られている」ということが何を基準としているかが問題であるが、) 中国、韓国人名の読みなどについては、例えば「金」は Kin と Kimu に分かれ、互いに誘導はなく、「金日成」のような著書の多い人については、Kin, Nissei から Kimu, Iruson に『を見よ』参照をしている。こうした例はあまりにも多すぎ、外国人名の問題としてまた、別個に扱わなければならない。

書名カードについては、多巻(20巻以上)ものときは叢書名カードは除いて、その書名のところに「分類目録『を見よ』」のカードを入れるこ

とにしている。そうすることによって、書名カードの減少に努めている。
また、Nippon と Nihon の読みのある「日本」はすべて Nippon とし、Nihon
のところに『を見よ』カードを入れて誘導している。こうした読みの統一
は後に述べる。

3) 同音異字の場合

同音異字の姓名は ①片かな ②平かな ③かなまじり ④漢字の順で
字の少ない順、同一字数の場合は第一字からの画数順、同一姓字で名の異
なる場合も、名の第一字から上記に従う。

- 〔例〕 ① Azuma, Kazuo 東 一夫 ②我妻 和男
① Goto, Akira 五島 昭 ②後藤 晃
① Hayakawa, Hiroshi 早川 宏 ②速川 浩

同姓異名の場合も

① Sato, Yoshio 佐藤良男 ②佐藤芳男 のように同一画数のも
のは書名のアルファベット順によって排列する

4) 同名異人の場合

同名異人の場合には書名のアルファベット順に排列する。

5) 同一著者の排列について

同一著者の中での排列は ①書名 ②出版者のアルファベット順による。
ただし、トレーシングの著者標目に s (件名著者) のあるものは同一著者
の a (著者) より後に排列し、その中で書名出版者のアルファベット順に
する。

6) 団体名の場合

団体名の場合は、日本目録規則新版予備版の (3. 3. 2. 2.) の原
則に基づいて原稿をとっているが、まだ65年版のカードも多く徐々に直し
つつある。たとえば、文部省の場合は文部省の後につく機関名は省略し、
トレーシングを「Monbusho」とし、各大学関係も「～大学」とだけトレ
ーシングし、その中で書名のアルファベット順に排列する。しかし、現代
ではまだその他の団体名でも統一されたカードではないため、団体名の見

出しを出しその中で書名順排列をして見易くした。

7) 長音について

長音についてはその取扱いに苦勞する。長音符 (〃) を用いる場合と、直前の母音を重ねる場合がある。著者は『国立国会図書館典拠録』に基づき、書名は『広辞苑』に拠って読みを調べ、長音符を使用しているが、カナ表記した場合、長音はそのまま例えば大阪 (おおさか) とありローマ字表記すると Ôsaka、大きい (おおきい) Ôkii、著者では、大島 (おおしま) Ôshima となり排列上は無視しているが戸惑いを持つひとつの問題点である。

8) 清濁音の読みについて

ローマ字 (ヘボン式) 表記のため、し→shi じ→ji さ→sa ざ→za、の時、『国立国会典拠録』に基づいて読みのトレーシングをしている。

〔例〕 中島 Nakajima Nakasima

野崎 Nozaki Nosaki

と同じ字を書いても五十音順なら清音として排列するので関係ないが、ローマ字表記だと J と S、Z と S のように排列が違ってくるので、著者は正確な氏名の読みを求めるであろうが、利用者はどちらかに統一し、一回の検索で目的が果たせる方が良好だろう。

9) 訓令式とヘボン式の違い

	訓令式	ヘボン式
シ	si	shi
チ	ti	chi
ツ	tu	tsu
フ	hu	fu
ジ (ヂ)	zi	ji
シャ	sya	sha
シュ	syu	shu
ショ	syo	sho

チャ	tya	cya
チュ	tyu	chu
チョ	tyo	cho
ジャ	zya	ja
ジュ	zyu	ju
ジョ	zyo	jo

このほか中京大学図書館のとりきめとして、

クイ→kui トウ→tou クェ→kue デュ→dyu ヒェ→he

などは用いることになっている。

ローマ字の訓令式とヘボンの違いによって、検索上利用者が迷うことは当然である。

学生にはガイダンスで説明するが、不慣れなローマ字と細かい排列規則で、実際、図書館に来てはじめてその複雑さに気づくと思う。図書館にはNDCの十進分類綱目表は提示されているが、これら詳細にわたる中京大学図書館の目録検索の為の凡例は提示していないので、ローマ字のヘボン式で表記していることを知らせる必要があると思う。この点については、五十音順、ローマ字の訓令式、ヘボン式順が統一されていれば相互利用の面においても戸惑いがないと思う。実際、実務で著者の読みを調べる為に第一優先で『国立国会図書館典拠録』（訓令式）を利用しているが、中京大学図書館はヘボン式の為、大きな相違点を感じている。

〔例〕

	訓令式	ヘボン式
古谷 幸吉	Huruya, Kôkiti	Furuya, Kôkichi
細川潤次郎	Hosokawa, Zyunzirô	Hosokawa, Junjirô
神保 成吉	Zinbo, Seikiti	Jinbo, Seikichi
地主 重美	Zinusi, Sigeyosi	Jinushi, Shigeyoshi
千葉 茂	Tiba, Sigeru	Chiba, Shigeru
千葉 四郎	Tiba, sirô	Chiba, shirô

10) 読みの統一

読みについてはつぎの例示のように取り決めている。

[例]

1 → ichi 2 → ni 3 → san 4 → shi 5 → go 6 → roku

7 → shichi 8 → hachi 9 → kyu 10 → ju

明日 → asu 便覧 → benran 文学界 → bungakukai

動物学会 → dōbutsu gakkai 博士 → hakase 人文 → jinbun

研究所 → kenkyujo 昨日 → kinō 年中行事 → nenjūgyoji

読本 → tokuhon 私 → watakushi 世論 → yoron 言う → yu など

国名・地名など固有名詞はキャピタルレターを使い、その用法は別に定める。

中国・韓国の地名は知名度によって、北京 → Pekin 慶州 → keishu に読み分けているが、非常に問題がある。

日本のように特に多いものは、Nihon, Hinomoto を採らず、Nippon に統一している。

著者のトレーシングは『日本目録規則』の例に従い、清少納言 → Sei shonagon 村山リウ → Murayama, Ryu 山部赤人 → Yamabe, Akahito とする。外国人名も規則に従う。

小見出しカード使用基準試案

前述の排列が少しでも、利用者に抵抗無く検索してもらえるように、適切な小見出しカード（山カード）の挿入を考えてみた。

①著者にはクリーム、書名にはピンク、分類にはホワイトの色山カードを用いる。（ボックスの見出しの色分けにしたがう。）

②山は左側に集中する。（右側は汚れたり、折れたりする。また中央、左右にふらなければ後のカードが見えないほど多くは挿入しない。）

③1/2山と1/4だけを使用する。

1/2山を使用する場合。

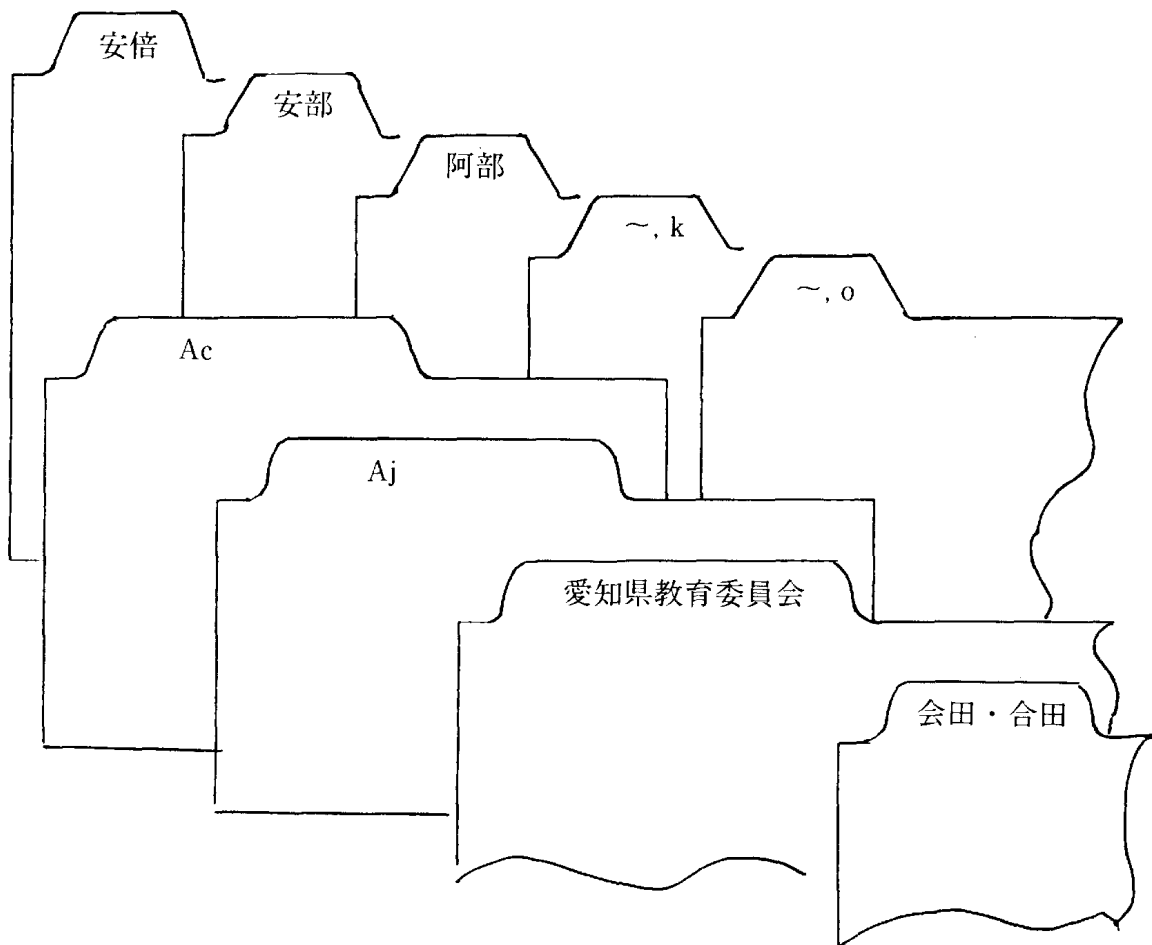
- a. アルファベット小見出しの、2文字めが変わるとき。
- b. 記載文字の多い（多くの同姓異字を一度に表示する）とき。

1/4山を使用する場合

- a. 同一カードが20枚以上のとき。
- b. 同姓カードが多数あるときは、先頭に姓を挿入し、50～60枚毎に名の漢字、またはアルファベット1文字を入れる。
- c. 20枚以内の同姓異字の場合は、1枚のカードに2人の姓を記入して入れる。

④漢字は黒インキ、アルファベットは黒のスタンプを用いる。

〔例〕



おわりに

実際にこの方法で見出しカードを入れてみた結果、記述ミスカードが意外に多く見つかったり、65年版カードと新版カードの混排による排列の迷いがあったり、とにかく排列の混乱が多いことに気づいた。目的の図書があるのに利用されないでは残念なのでカード入れ作業に関しては、100%とはいかないけれど、それに近いカード排列が出来るよう2段階システムをとっている。まず1回目はカードを落とさないでカードボックスの心棒の上に乗せて置いて、次に別の人チェックしながら落とす事にしている。つまり、校正作業をとおして、ケアレスミスや、細則のおよばない場合の排列方法の統一をはかり正確な排列を心がけることにしたわけである。

一つの誤排が次々にミスを生み、次から次へと増える一方のカード入れ作業に追われ、基からの修正がきかなくなってしまう。ミスは検索に支障が無ければ許される、という考えは捨てなければならない。

このように、みだしカードを挿入し、検索の便をはかる以前の問題が余りにも多いことに驚く。また、排列細則についても、図書館員は知っているが、利用者は全く知らないし、例え細かい凡例を掲げても読んではくれないだろう。従って、カードボックスを開けると同時に目に飛び込んで来る漢字見出しの有効性に頼ろうとした訳である。

中京大学図書館も近い将来コンピュータが導入されることになっているが、カード目録の併用は当分続くことになるし、現実問題として、現在の利用者に資料を提供していく上で少しでも利用しやすくする努力は怠ってはならないと思う。

この試案は、実験的に行っているうちにも、多くの矛盾が出てきて、とても、発表出来るようなものではないことに気付いた。しかし、日常業務のなかで、なんとなく見逃してしまうほどのことを取りあげてみることによって新しい発見をしたような気がする。私自身、図書館勤務歴が短いので、経験のある人には当たり前の事かもしれないが、私にとっては排列の問題、それ

に、見出しカードの適切な与え方は、非常に奥の深い問題である。この問題は今後も考え続けたいと思いますので、皆様のお考えをお聞かせ下されば幸いです。

参考文献

1. 『書誌作成マニュアル』 日本索引家協会編
2. 『索引作成マニュアル』 日本索引協会編
3. 『資料組織法』 木原通夫〔ほか〕著
4. 『日本目録規則新版予備版』 日本図書館協会目録委員会
5. 『大学図書館における目録編成規則』 私立大学図書館協会目録編成規則研究グループ
6. 『資料目録法概説』 梶二三四著
7. 『日本目録規則1965年版』 日本図書館協会目録委員会編
8. 『日本目録規則1987年版』 日本図書館協会委員会編
9. 『国立国会図書館著者名典拠録』 国立国会図書館編
10. 『N T Tの50音別電話帳』 N T T
11. 『日本全国書誌』 国立国会図書館編